

同志社大学歴史資料館 館報

第19号

はじめに

歴史資料館館長 植木朝子

I 歴史資料館（2015年度）の運営

II 調査・研究報告

企画展・講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男～没後50年～」について

若林邦彦・浜中邦弘（1）

講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男」講演録1

白石太一郎（7）

酒詰仲男先生と初期同志社考古学の群像

講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男」講演録2

羽生淳子（15）

縄文生態研究と酒詰仲男

講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男」講演録3

酒詰治男（34）

「同志社文学」から「貝塚」へ

今出川キャンパス整備に伴う立会調査成果（2009～2012年度）

反田実樹（53）

2016.10

同志社大学歴史資料館

講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男」講演録 2

縄文生態研究と酒詰仲男

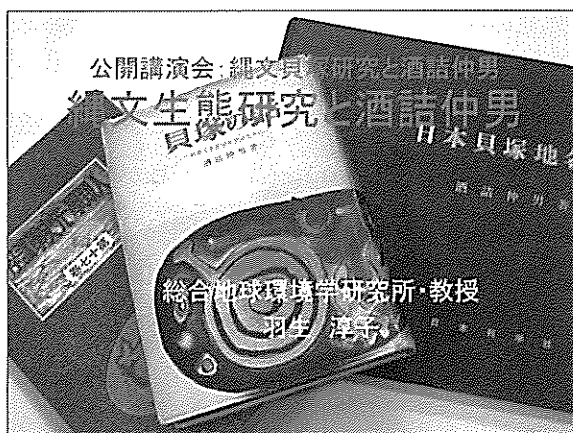
カリフォルニア大学バークレー校教授・
総合地球環境学研究所客員教授 羽生 淳子

ご紹介いただきました羽生淳子です。
今日はよろしくお願いいたします。

まず、同志社大学の松藤先生、植木先生、
若林先生、その他の同志社大学の皆さま
に、本日お呼びいただきましたことを厚く
御礼申し上げます。

私は縄文時代を研究しておりますが、酒
詰先生には直接お会いしたことはありません。
最初に若林さんからこの講演のお話を
いただいたときには、とても私には力に余

ると思ったのですが、せっかくの機会ですので、これを機会に勉強させて頂こうと思いました。です
から、間違えたことを言うかもしれません。もし間違えましたら、皆さま、話の途中でも結構ですの
で、それは間違っている、その読み方は違うなどおっしゃってくだされば私も勉強になりますので、
よろしくお願いいたします。(スライド1)



(スライド1)

私は縄文時代を研究している関係上、酒詰先生
の生業のお話は、あちこちで引用させていただ
いております。酒詰先生の大きな研究テーマとし
ては、貝塚、自然遺物、食料や定住の問題、とい
う三つが挙げられるかと思えます。これらの研究を
大きな脈絡で見えていきますと、貝塚の研究は海
進海退や気候変動といった問題に、自然遺物の研
究は生物学と歴史学の接点に、そして食料や定住
の問題は大きな意味での生業集落システムと私
たちが呼んでいるテーマに、それぞれ直接的ないし間

接的につながっています。これらの酒詰先生のご研究を拝読して、私がすごいと思うのは、まず、と
ても早い時代から定量的な分析を心がけていらっしゃるということです。それから、ご著書を読んで
おきますと、演繹的なものの考え方に基づいて資料をご覧になっているから、このような研究ができた
のだらうと思うことが多々あります。三番目に感じるののは、先生のご研究の国際性です。(スライ
ド2)

1.はじめに
酒詰仲男先生の研究

| | |
|------------------------------------|---|
| 研究テーマ ・ 貝塚 ・ 自然遺物 ・ 食料・定住 | 研究の大きな脈絡 ・ 海進海退と気候変動 ・ 生物学と歴史学 ・ 生業・集落システム |
|------------------------------------|---|

↓

定量的分析(例:貝塚間交通問題試論)
 演繹的思考(例:日本原始農業試論)
 国際性(例:貝塚地名表の索引はABC順)

(スライド 2)



(スライド 3)

日吉の丘の貝塚群
1969年

下田(東)貝塚
縄文前期・関山～黒浜式期

(スライド 4)

まず、一番目の定量的分析について見てみましょう。酒詰先生の比較的初期のご著作に「神奈川県下貝塚間交通問題試論」というご論文がありますが、この論文では、すでに定量的なデータがきちんと出されています。演繹的な思考については、例えば「日本原始農業試論」を拝読しますと、全体の枠組みを頭の中に持っていらして、その中でどういうデータが必要だろうかということを考えられた上で、着実にデータを見ていらっしやっただろうと感じます。それから三番目の国際性ということについては、『日本縄文石器時代食料総説』を拝読したときに、英文のアブストラクトがきちんと書いていらっしやることに、失礼な言い方かもしれませんが感銘を受けました。小さなことかもしれませんが、『日本貝塚地名表』の索引は ABC 順になっています。こういったことから考えましても、きわめて国際性の高いお仕事をなさっていたことがわかりますし、海外の少し大きな図書館に行きますと、酒詰先生のご著書はたいてい入っております。そういう意味で、本当に先見の明があった方なのだろうと拝察しています。

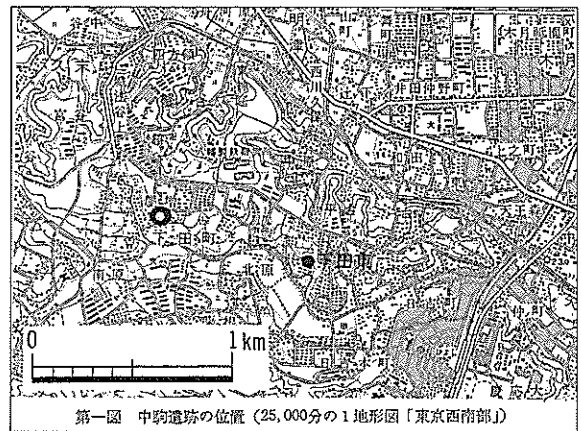
先ほども申しましたように、私はご本人にお会いしたことはありません。ただし、私が子供時代を過ごしたところに酒詰先生との関わりがあります。私が生まれ育ったのは横浜市と川崎市の境目辺りになります。この地図で線の入っている所がその境目なのですが、ここが多摩川、その南のほうは鶴見川です。鶴見川の支流には矢上川という川があり、こちらが鶴見川でその支流には早淵川

という川があります。私が生まれ育ったのは、ちょうどこのあたり、川崎市と横浜市の境の辺りで、まさに矢上貝塚がある台地の上です。これをご覧になると分かりますが、多摩川から東横線がその辺りを通るのですが、ここが東横線で、多摩川から来て最初にあたる丘が日吉の丘になります。この台地上に酒詰先生が調査なさった沢山の貝塚があります。(スライド 3)

私はこの台地の上で育ちました。日吉の丘の貝塚群の中の下田東という貝塚が、私が最初に発掘に

行った遺跡です。私が小学校の4年生の時です。左が妹で小学校2年生です。(スライド4、5)

1969年の秋に、日吉の丘でガレージの改修をしているお宅があり、うちの母が、そこに貝が散らばっているのに気づきました。現在、奈良文化財研究所の所長をなさっている松村恵司さんが、当時、うちから歩いて2分ぐらいの所に住んでいらっしやいましたので、母が、「これ貝塚じゃないの?」ということで松村さんにお聞きし、松村さんたちと一緒にこの貝塚に行ったのが私の最初の「発掘」です。



第一図 中駒遺跡の位置 (25,000分の1地形図「東京西南部」)

(スライド5)

これは1969年の写真です。1969年といえば、ちょうど日本は大規模な国土開発の最中でした。当時、日吉の丘の近辺には、開発や耕作にさらされた貝塚がたくさんありました。例えば、高田中居根貝塚で、これは1970年頃の写真です。(スライド6)

この写真では、植木を掘り返したところに貝殻がごろごろとあり、私もそこで石の矢じりや貝殻を



(スライド6)

拾ったりしていました。つまり、私は酒詰先生にお会いしたことはないのですが、私の考古学の原点になっているのは酒詰先生が貝塚研究を精力的に行われた場所であり、その結果として、私が考古学を勉強していく途上で、何度も先生のお仕事に行きあたっています。

もう一つ、私は考古学の中でもとくに生態学的なアプローチに興味を持っていますが、生態学的な考古学研究の歴史を考えた場合、酒詰先生のお仕事がいかに大事かということを感じています。

私は、現在、総合地球環境学研究所でプロジェクトを行っていますが、私のももとの研究の本拠地はカリフォルニア大学バークレー校という所にあります。

カリフォルニアをはじめとする北米では、考古学は人類学の一分野です。人類学のラベルの下には、文化人類学、考古学、生物・形質人類学、言語人類学という四つの分野があり、これら4分野の接点を考える際、生態学的なアプローチは重要です。現在、私は、青森県の縄文時代前期から中

私の考古学履歴

- 1969年～(小4～): 考古少女
- 1972～1975年: 中部考古会(顧問・藤村東男先生)
- 1975～1978年: 慶応女子高考古会(顧問・藤村東男先生)
- 1978～1982年: 慶大考研・民考一期生(鈴木公雄先生)
- 1982～1984年: 慶応大学・修士課程(鈴木公雄先生)
- 1984年: 東京都埋文センター・調査補助員
- 1984～1988年: 東京大学理学部助手(遺跡調査室)
- 1988～1996年: カナダ・マギル大学人類学科博士課程(指導教授・井川史子先生)
- 1996年～現在: カリフォルニア大学バークレー校人類学科助教授・准教授・教授
- 2014年～現在: 総合地球環境学研究所教授

(スライド7)

私の本拠地:カリフォルニア大学バークレー校の人類学科

- 文化人類学
- 考古学
- 生物(形質)人類学
- 言語人類学
- 青森県縄文時代前期～中期の集落研究
- 生態人類学的アプローチ



(スライド8)

地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続性 — 歴史生態学からのアプローチ —

総合地球環境学研究所(上賀茂)における学際的な研究プロジェクト

- 長期変化班
- 民族・社会調査班
- 実施・普及・政策提言班



(スライド9)

期の集落資料を中心に研究を進めていますが、この研究でも、生態人類学的なアプローチが非常に大事です。それから、私は、昨年从上賀茂の総合地球環境学研究所で、「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続性」という学際的なプロジェクトのリーダーを務めていますが、このプロジェクトで考古学的事例と民族誌事例との接点を考えるときにも、酒詰先生のお仕事がたいへん参考になります。(スライド7、8、9)

それでは、今日は、このようなバックグラウンドを持った私の視点から、酒詰先生のお仕事の特徴について、振り返ってみたいと思います。

先ほども申し上げたように、酒詰先生のお仕事としては、大事なものが三つ挙げられるかと思えます。一番目は貝塚の発掘、そしてその成果に基づいて縄文生態研究の基礎をつくられたことです。その過程で、二番目にあげた縄文集落研究の基礎も同時につくられたのだと思えます。三番目に、動物・植物遺存体、つまりいわゆる自然遺物の研究を通じて、食料と生業の研究を体系的に進められました。これらは相互に重なり合いながら、その後の縄文時代研究の基礎となる三つのテーマであり、その意味で酒詰先生はとても大事な研究をなさった方です。先生がご発表なさった論文の全てについて原本にあたるということは、なかなか難しいのですが、芹沢長介先生が編集なさった『日本考古学選集』の「酒詰仲男集」の中には、通常は手に入りにくい論考も入っています。(スライド10、11)

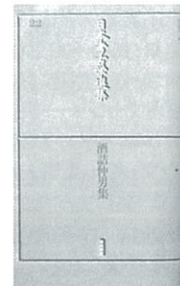
2. 酒詰仲男の業績

- 1) 貝塚の発掘と縄文生態研究の基礎
- 2) 縄文集落研究の系譜
- 3) 動物・植物遺体(自然遺物)研究と食・生業



(スライド10)

日本考古学選集22 酒詰仲男集 芹沢長介編 1975 築地書館



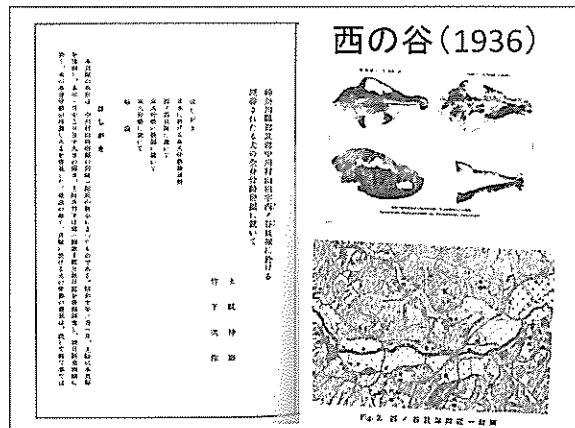
(スライド11)

今日の話の中心は貝塚研究なので、ここでは、主に戦前のご研究をまず振り返ってみて、その後で戦後のご研究に話を進めたいと思います。(スライド12)

酒詰先生と一緒にたくさんのお仕事をなさった研究者として、2015年の2月に亡くなった江坂輝彌先生がいらっしゃいます。最近、私は、江坂先生のお仕事を振り返る機会がありましたが、そこで改めて気がついたのは、酒詰先生と江坂先生が関東の貝塚を集中的に発掘なさった期間は意外と短いということです。1934年に酒詰先生が大山史前学研究所の研究員になられてから、1940年前後までの辺りに集中して、たくさんの貝塚遺跡に関する論文が出ています。

このスライドに挙げましたのは、その中でも特に日吉の丘にある遺跡、それから港北ニュータウン地域を中心として、縄文前期後半の諸磯式期前後の遺跡で、よく名前が知られているものです。もちろんこれで全部ではなく、『貝塚に学ぶ』を読んでいただくと、ひとつずつの発掘調査についての経過が出ています。1936年の西の谷遺跡、翌年の下田町東、これは先ほど私が最初に発掘したと言った下田東遺跡のことですが、その後の境田、表谷東、四枚畑、諸磯、水子と、これら全てが1930年代後半から1940年代初めに集中しています。(スライド13)

この時期のお仕事についてもうひとつ感銘を受けたのは、発掘なさったあと、わりとすぐに報告を出していらっしゃるということです。私も含めた考古学者は、掘って発掘報告を出すのがいかに大変な作業かということが、身にしみているかと思



(スライド14)

略年表(戦前～戦中)

- 1934～1938.1 大山史前学研究所研究員
- 1934暮～1936 服部報公会研究費(年600円)
- 1939 東京帝国大学理学部人類学教室嘱託
- 1940 東京帝国大学理学部嘱託

(スライド12)

1) 貝塚の発掘と縄文生態研究の基礎

a) 貝塚遺跡と住居址の調査

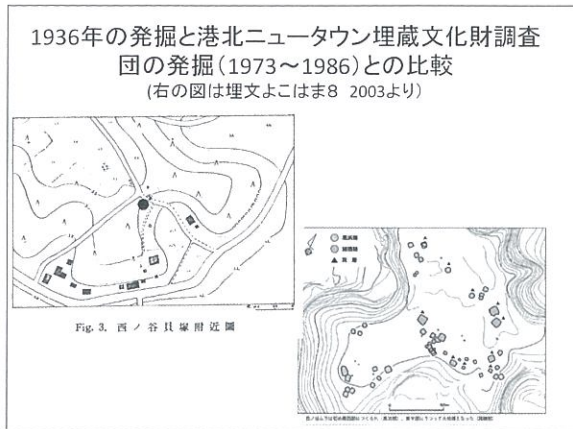
神奈川県下貝塚(発掘・報告)

- 西の谷(にしのだに) (1936)
- 下田[町]東(しもだ[ちょう]ひがし) (1937)
- 境田(さかいだ) (1935～1937)
- 表谷東(おもてやとひがし) (1939発掘、1942報告)
- 四枚畑(よんまいばた) (1938)
- 諸磯(もろいそ) (1938)
- 水子(みずこ) (1939発掘、1942報告) etc.

(スライド13)

な作業かということが、身にしみているかと思えます。例えば、西の谷貝塚、これは日吉の丘よりも少し奥の早淵川のほうにある貝塚なのですが、ここで犬の全身骨格を調査なさった例では、発掘なさった年に報告が出ています。(スライド14)

西の谷貝塚は、早淵川の右岸にあり、この遺跡は1936年に酒詰先生が発掘なさったあと、後年、港北ニュータウンの埋蔵文化財調査団が1973年から1986年にかけて発掘しています。スライド「15」の左側が酒詰先生の報告に出ている遺跡の貝塚付



(スライド15)



(スライド16)

近図、右側が港北ニュータウン調査団による報告です。(スライド15、16)

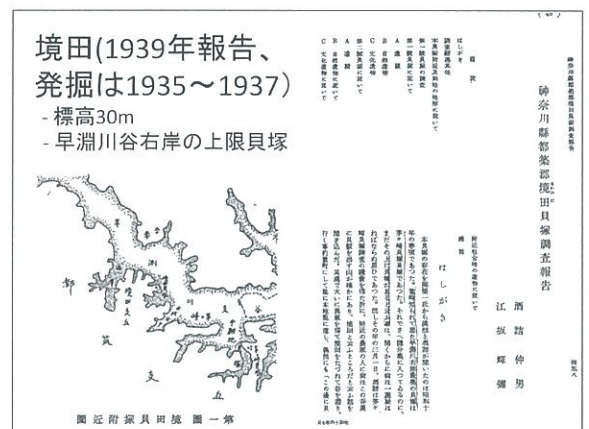
西の谷貝塚では、諸磯式の土器がたくさん出ておりますけれども、この時期の鶴見川近辺の貝塚というのは、貝塚と申しましても貝層の堆積面積はあまり大きくなく、斜面貝塚か、あるいは住居の中に貝が捨てられているといったものが多いです。

それから、私は諸磯式の資料を博士論文で扱った関係上、石器組成についても調べたのですが、面白いことに、西の谷貝塚は磨石という植物質食料をすりつぶす道具が非常に多い遺跡です。つまり、貝塚と言いながらも、縄文時代の食べ物の比重が植物質食料の方に少しずつ片寄っていった時期の始まりを示すデータが出ている遺跡であり、その意味でも、縄文時代研究の中で重要です。

酒詰先生が調査された有名な遺跡のもうひとつの例としては、境田貝塚があげられます。この遺跡の発掘は1935年から1937年、報告は1939年で江坂輝彌先生との共著になっています。これは、早淵川の貝塚群のなかで一番の上限になるぐらいの貝塚です。標高約30メートルのところですが。皆さんもご存じかと思いますが、縄文時代の貝塚は台地の上にあるものが多く、これについて、酒詰先生は標高20メートルのラインより上というのが大事だとおっしゃっています。この貝塚もその典型的なものです。境田貝塚の発掘では、酒詰先生が生態学的なアプローチを用いられたということが知られています。

この発掘は、同時に縄文前期の編年を確立したものとしてもよく知られていて、黒浜式という繊維を入れた土器の終末期から縄文前期の終わりまでの土器編年が確立された発掘になります。スライド19に示した出土土器は、ちょうど矢上貝塚と同じぐらいの時期だと思うのですが、磨消縄文を多用しています。(スライド17、18、19)

もうひとつ、鶴見川近辺の発掘で重要な遺跡として表谷東(おもてやとひがし)貝塚があり



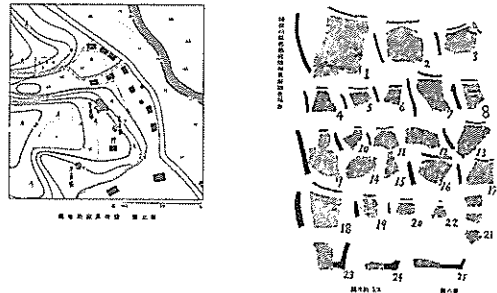
(スライド17)

諸磯式文化の編年素案
(酒詰・江坂1939)

- ・ 黒浜式文化・末期＝
下田町東貝塚期(境田第1号貝塚期)＝
- ・ 境田第2号貝塚期(磨消手法)＝
- ・ 高田中居根貝塚期＝
- ・ 矢上谷戸斜面貝塚期＝
- ・ 四枚畑貝塚期(浮線文).....
- ・ □ =====
- ・ 十三菩提式初期

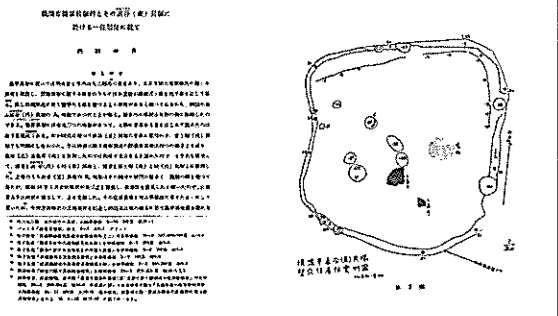
(スライド18)

境田:貝層の分布と出土遺物



(スライド19)

表谷(おもてやとひがし)貝塚
発掘報告(酒詰1942)



(スライド20)

表谷東報文: 竪穴住居比較表

| 各道竪穴要點比較表 | | | | | | | | |
|-------------|----|----|----|---------------|---|-----------------|----------|-----------|
| 遺跡 | 築具 | 全形 | 方位 | 長さ | 幅 | 柱穴 | 竪穴 | 吹瓦 |
| 小例 | 葦方 | 方形 | 北南 | 3.17 | + | 穴8 穴6 | 穴1 穴1 | 10M 25 |
| 折本 | 同上 | 同上 | 東西 | 2.8 | + | 穴4 穴14 穴6 | 穴1 穴1 | 30 |
| 下田(原) | 葦方 | 方形 | 同上 | 5.0 | + | 穴6 穴6 | 穴1 穴1 | 0 10 |
| 諸磯 | 葦方 | 方形 | 同上 | 3.4 (+1.9) | + | 穴4 穴6 | 穴3 | 16 40 |
| 四枚畑 | 葦方 | 方形 | 北南 | 5.4 | + | 77 | 穴4 穴6 | 30 20 |
| 水子 (第6段) | 葦方 | 方形 | 北南 | 11.7 | + | 穴8 穴6 | 穴3 穴1 | 0 |
| 水子 (第1段) | 葦方 | 方形 | 北南 | 5.0 | + | 穴8 穴6 | 穴1 穴1 | 0 |

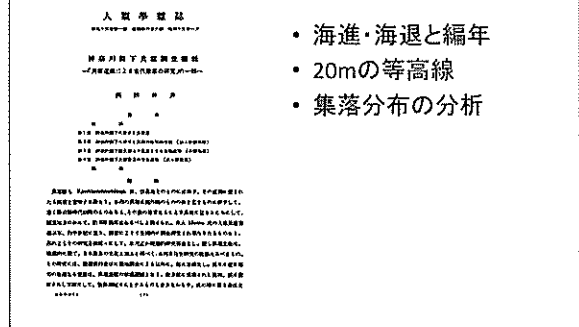
(スライド21)

ます。この調査では、竪穴住居が丁寧に発掘されておりまして、住居の計測値などが他の遺跡との比較の観点から報告されておりまして。(スライド20、21)

これらの貝塚の発掘を通じて、酒詰先生は、早くも1938年に「神奈川県下貝塚調査概報」という大部の報告を出されています。ここでは、貝塚遺跡の研究を古代集落研究の一部と位置づけています。とくに、海進海退については、それまでにもいろいろと議論があったのですが、ここで酒詰先生の見解がはっきり出てきてまして、それが、海進海退に関するその後の研究の基盤となりました。

(スライド22)

b) 神奈川県下貝塚調査概報「貝塚遺跡による古代集落の研究」の一部(1938)



(スライド22)

この論文では、先ほど申しました、20メートルの等高線よりも上のほうに貝塚が分布しているということが述べられています。また、このような分析を通じて、貝塚の個々の発掘だけではなく、集落分布の分析という、縄文集落論の基礎になるお仕事もここでなさっています。そして、私が感銘を受けたのは、この時点で、定量的なデータを

1 多摩川谷に關するもの(多摩川段一期段々式)

| 遺跡番号 | 代表者 | 位置 | 年代 | 層位 | 面積 | 調査者 | 調査年 | 調査内容 | 調査結果 | 備考 |
|------|-----|------------|----|----|-----|-----|------|------|------|----|
| 1 | 大塚 | 12.2.20.21 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 2 | 小塚 | 12.2.20.22 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 3 | 中野 | 12.2.20.23 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 4 | 小塚 | 12.2.20.24 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 5 | 大塚 | 12.2.20.25 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 6 | 小塚 | 12.2.20.26 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 7 | 中野 | 12.2.20.27 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |

(スライド23)

11 鶴見川谷に關するもの(多摩川段二期段々式)

| 遺跡番号 | 代表者 | 位置 | 年代 | 層位 | 面積 | 調査者 | 調査年 | 調査内容 | 調査結果 | 備考 |
|------|-----|-----------|----|----|-----|-----|------|------|------|----|
| 1 | 大塚 | 12.2.21.1 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 2 | 小塚 | 12.2.21.2 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 3 | 中野 | 12.2.21.3 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 4 | 小塚 | 12.2.21.4 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 5 | 大塚 | 12.2.21.5 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 6 | 小塚 | 12.2.21.6 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |
| 7 | 中野 | 12.2.21.7 | 20 | 1 | 100 | 中野 | 1950 | 調査 | 縄文前期 | 遺跡 |

(スライド24)

きちんと出していることです。つまり、単なる遺跡リストではなく、標高など、今でしたらGPSに落とすときに必要となる遺跡立地の基礎データが全て出ています。

この表では、こちらが多摩川のほうの谷沿いの遺跡(スライド23)で、こちらが鶴見川流域の遺跡(スライド24)です。このような定量的なデータを、この時点でもう作っていらっしゃるのです。おそらく、発掘調査をしたあとでこの表を作ったのではなく、こういうデータを取ろうと思って体系的にお仕事をしていないと、この表は作れないと思います。

この論文とほぼ同時期くらいから、真福寺遺跡などの低湿地遺跡の発掘もなされています。写真は『貝塚に学ぶ』から取らせていただきました。低湿地遺跡というのは、動物遺存体や植物の種などの残りが良いということで、生態学的研究を行うのには非常に大事な遺跡です。その先駆けになるような調査をなされています。(スライド25)

神奈川県下の貝塚を一通りご覧になったのと前後して、東京都下における貝塚の分布図というものも、この図のような形で出していちゃいます。私が諸磯式期の遺跡の分析をした際に基礎になった東京の遺跡は、大体ここに載っています。(スライド26)

酒詰先生のお仕事でもう一つ大事なものは、神奈川県下の貝塚の発掘の頃から、いわゆる考古少年といった人たちと共同作業をなされていることです。論文を書く際にも、江坂輝彌先生、芹沢長介先生な

c) 低湿地遺跡の発掘

- 真福寺(写真は『貝塚に学ぶ』より)



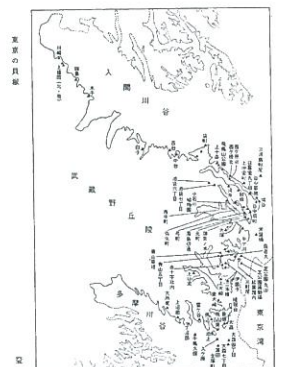
真福寺の巨大土壇77住居址
(『貝塚に学ぶ』65頁)



真福寺遺跡の発掘
三井物産株式会社(現三井物産)調査隊

(スライド25)

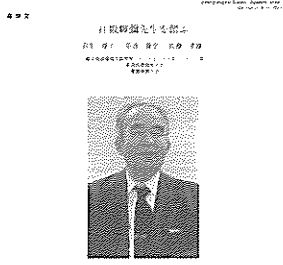
東京都下における 貝塚分布図 (『貝塚に学ぶ』65頁)



(スライド26)

d) 「考古少年」たちとの共同研究

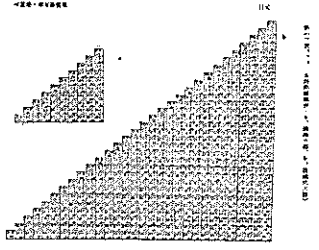
- 芹沢長介
- 江坂輝彌
- 吉田格



(スライド27)

2) 縄文集落研究の系譜

a) 神奈川県下貝塚間交通問題試論(1940)



(スライド28)

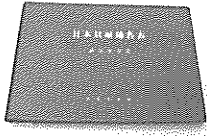
どと一緒に作業されたものを発表されています。吉田格先生のお名前もあちこちに見られます。(スライド27)

先ほども申しましたように、酒詰先生は、貝塚遺跡の定量的なデータを取り、さらに貝塚を伴う集落の分布を見るという形を通して、1940年の「神奈川県下貝塚交通問題試論」できわめて大胆なお仕事をなさっています。この論文では、縄文時代の貝塚をいくつかの大まかな時期に分けまして、もし各時期の遺跡が同時に存在したとしたら、その間の交通はどういったものだったのだろうか、ということについて、陸路と水路について遺跡間の距離という観点から研究なさっています。とても大胆な仮定なのですが、このような仮定の下で考えたらどうなるかという考えに基づき、理路整然と書かれています。私が卒論を書いた際に、この論文を拝読して、その端正さに感動したのを覚えています。このような研究を1940年の段階でなさっているということに、今でも大きな感銘を受けます。これらの戦前のご研究の積み重ねが、戦後の総括的なご研究につながっていったのだらうと思います。(スライド28)

同志社大学に移られてからのご研究の流れは、さきほどの白石先生のお話や、松藤先生のお話の中からも伺えたかと思えます。アメリカでの研究を中心に生態学的な考古学を学んできた私にとっては、『日本貝塚地名表』、それからその2年ほど後に出版された『日本縄文石器時代食料総説』といった、

b) 日本貝塚地名表(1959)
縄文集落研究の基礎データ

| | |
|-----|------|
| 北海道 | 127 |
| 東北 | 280 |
| 関東 | 1038 |
| 中部 | 210 |
| 近畿 | 49 |
| 中国 | 305 |
| 四国 | 46 |
| 九州 | 283 |
| 国内計 | 2337 |



(スライド29)

縄文時代の生業と集落を研究する上での基礎データとなったご著書が特に重要に感じられます。(スライド29)

『貝塚地名表』には、約2,300余りの日本の貝塚が載っています。左側に示した表は『貝塚地名表』に基づいて私がまとめさせていただいたものです。小さな計算間違いもあるようなので、まとめるのが少し難しかったのですが、ざっと見て大体このぐらいの数とだけいただければと思います。先ほども申しましたように、右側の写真の

c) 古代日本における「定住」をめぐる
諸問題(1961)

- 定住・新石器時代・農耕
- テリトリー存在を推測
- 集落の立地:海・山・中間地帯
- 交易の重要性
- デンプン性食料が主食
- イヌ・イノシシ?の飼育
- 湧水のある平坦地
- 主食料生産と交易財生産

(スライド30)

『貝塚地名表』は、縄文時代生業研究の基礎になるものです。同時に、貝塚の数ということを考えるときにも、非常に貴重なものです。

集落遺跡は、研究が進んで発掘数が増えるに伴って、戦後、その総数がどんどん増えてきたわけなのですが、貝塚は土の表面で見ただけでも分かりやすいので、このご本のあとに、それほど極端に数が増えたということはありません。ここに載っているものが縄文時代の貝塚の主なものの全部であるとは言いませんが、かなりのものはこの本

に入っていると考えていただいて結構だと思います。

これを踏まえてこの表の数値を見ていただきますと、パッと見て分かる通り、関東が突出しています。北海道などについては調査不足ということもありますが、大体の傾向というのはそんなに大きくは変わらないと思います。ですから、ここにあげられている数字は、縄文時代の集落研究、それからもう少し後で小山修三先生が行なわれた縄文時代の人口推定を考える際にも、基礎になる資料です。

これと前後して、いくつかの重要な論文が書かれています。その一つが、「古代日本における定住をめぐる諸問題」という、1961年のご論考です。この中では、酒詰先生は、定住と新石器時代という概念を明確にうち出されて、縄文時代には農耕があったに違いない、とおっしゃっています。それと関連してテリトリー、つまり領域の存在を推測なさっています。また、海・山・中間地帯という個々の集落の位置に注目し、交易が重要だったに違いない、と指摘されています。もう一つ大事なことは、デンプン質の食料が主食だったに違いないと論じておられます。ここでは、主食という言葉をはっきり使っていらっしゃいます。動物については、イヌのほかに、イノシシについても飼育があったのではないかということをおっしゃっています。遺跡の立地については、湧き水のある平坦地が大事であることを指摘し、さらに、主食料の生産と交易材の生産の両方について研究者は見るべきであるとおっしゃっています。今考えましても、数々の大事な指摘を、1961年の段階、つまり今から50年以上前に出されています。(スライド30)

ここで述べられている主旨の片鱗は、それ以前にお書きになったそれぞれの著作でも、戦前から流れとしてはあるのですが、今、読みかえしてみても、キーワードを拾い上げただけでこういった形になるということが、この論文の重要性を示していると思います。

この点を考える際にたいへん興味深いのが、和島誠一先生と酒詰仲男先生との交流です。和島先生は『貝塚に学ぶ』の補筆をなさっていらっしゃることから考えても、お二人の間には、非常に密な学問上のご交流があったと推測されます。古くは水子貝塚などの発掘なども一緒なさっています。

和島先生は、酒詰先生のお仕事について、記載的な生物学をきわめて高く評価なさっています。一方で、酒詰先生が、日本史上における氏族制度時代、奴隷経済時代、古代国家についての古い論文も書かれていて、その上で生物学的なご研究をなさっているということも、『貝塚に学ぶ』でおっしゃ

d) 和島誠一と酒詰仲男

- ・水子貝塚などの発掘
- ・『貝塚に学ぶ』の補筆
- ・記載的な生物学
- ・「日本史上に於ける氏族制度地代・奴隷経済時代・古代国家に就いて」(土岐仲雄1931)
- ・貝塚の背後になる集落
- ・「酒詰さんや私が貝層のない環状貝塚の中央部を掘り出したら、長谷部先生から叱られた」

(スライド31)

1938年春

- ・「私と江坂輝弥が小豆沢の四枚畑で前期諸磯式期の堅穴を掘ったとき、それを見学にきた和島誠一が、その側の凸版印刷株式会社の敷地で、古墳時代に属する土師の堅穴を見つけ、それを三カ月ほどかかって、二十数個も掘って、当時の村落の姿をほのかに推測されるような発掘をやった。金も根気もよく続いたものだ」と大いに敬意を表した...」
(『貝塚に学ぶ』60頁)

(スライド32)

っています。和島先生のご論考の端々から、貝塚の背後にある集落について、酒詰先生がいつも目を向けられながらお仕事をなさっていたことが伺えます。「酒詰さんや私が貝層のない環状貝塚の中央部を掘り出したら、長谷部先生から叱られた」という楽しいエピソードも語られています。(スライド31)

『貝塚に学ぶ』の中でも、1938年の春に四枚畑の貝塚を酒詰先生と和島先生が発掘したときに、その横で和島先生が古墳時代に属する土師(はじ)の堅穴を見つけて、それを3カ月ほどかかって、二十数軒も掘ったということが書かれています。その頃から和島先生と酒詰先生のお仕事、お互いにリンクしていたということがよく分かります。(スライド32)

酒詰先生は、動植物遺存体を中心とする自然遺物の研究についても、非常に重要な仕事をなさっています。その一つとして、「所謂棒つきカキについて」という短文のご論考が1940年に出版されています。これは、原本入手が困難なため、まぼろしの論文と呼ばれていますが、芹沢先生の編集なされた論集に入っているの、今では誰でも拝読することができます。「カキの左側を裏返しに見ると、何に付着していたのか、石膏で型を取ったように分かる。これは意識的に木の枝を沈めて養殖したのではないか」という説で、報告例として縄文時代前期の貝塚を中心に、数多くの事例が挙がっています。カキの養殖を含めた資源管理の可能性は、ここ10年程、縄文時代の研究者が、環境管理という形で改めて検討することが増えてきた研究課題です。これについて、1940年の時点で、すでにおっしゃっているのは、とても大事なことです。(スライド33)

このスライドは、近年出版された、西の谷貝塚出土の貝殻の説明です。ここでも、棒つきのカキの養殖の話が触れられています。(スライド34)

カキの話よりも、恐らくさらに有名なのは、1956年の「日本原始農業試論」、そしてクリ栽

3) 動植物遺体(自然遺物)研究と食・生業

- a) 所謂棒つきカキについて(1940)
- カキの左殻を裏返しに見ると 何に付着していたか、石膏で型をとったようにわかる
 - 棒に付着した痕跡のある資料あり
 - 意識的に木の枝を沈め養殖?
 - 報告例: 山田八幡台、西の谷、境田、栗崎、坂堂(さかんど)、深作、炭釜(黒浜)、花積、元町、飛の台

(スライド33)



(スライド34)

培の可能性についてのご指摘かと思えます。縄文時代は狩猟採集の自然経済だったというのが定説だけれども、本当にそれで良いのかと、大胆に疑問を投げかけられた論文です。

この論文は、従来の定説を世界史的な視点から再検討なさるといって形をとって、まず稲をつくることだけが農業ではないことを指摘し、縄文時代についても、農業が存在しただけではなく、農業が支配的な生業だったと考えても良いのではないか、というところまで踏み込んで話をなさ

ています。さらに、畑仕事や貯蔵・管理・調理といったことは女性の仕事だから、母系社会が考えられるのではないかとまで書かれています。そして、原始農耕の立証に向けて、実際に栽培された植物は何だったのだろうかという問いを投げかけて、クリが重要だった可能性を指摘なさっています。クリ以外にも、トチやクルミの利用、それから前裁園的な農耕の可能性についておっしゃっています。クリ栽培の可能性は、1990年代になってから、縄文時代の研究者が特に注目しているトピックです。

ですから、私たちがクリ栽培の可能性を論じる時に、最初に戻らなければならないのが酒詰先生のお仕事です。また、この論文では、定住と農耕があったのなら、畑の遺跡もあるはずではないかと考えています。つまり、まず生活の特徴を想定し、そこから逆に考えて、そうだとしたらどういった遺構があるはずか、という非常に演繹的なお話をなさっているわけです。

また、この論文では、遺物の大部分が農耕用具であることを実証すべきだと主張して、農耕用具としての有肩石斧の再検討を行っています。この考え方は、おそらく松本信廣先生や大山柏先生のお仕事までさかのぼるものだと思います。それから調理用具としての石棒や石皿の重要性を論じて、木の棒でも十分土は起こせたはずなので、道具はいろいろあつただろうとおっしゃっています。もう一つ、カレンダーの重要性について、秋田県大湯の環状列石を含めた日時計の存在を論じています。つまり、現在、縄文時代の研究者がテーマにしていることの概要が、この論文で、ほとんど既に述べられていることが分かります。

この数年後、1961年には、『日本縄文石器時代食料総説』が発表されました。これも『貝塚地名表』と並んで、海外では研究者が基礎文献として頼りにしているものです。1961年の段階で836遺跡から出土した貝類、節足動物、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類、それから植物については数が少ないのですが、総記がなされています。この本を一覧表として評価してしまうのは簡単なのですが、実はそれだけでなく、いろいろ重要なご指摘をなさっています。たとえば、何の種類に限らず北は少なく南は多い、ということをおっしゃっています。食べ物の多様性、それから定住の問題を考える場合には、とても大事な指摘です。(スライド35、36)

『食料総説』は、その大部分はリストなのですが、余論として ABCD と挙げました四つが載っております。この余論がそれぞれ大事です。食料獲得について、食料の貯蔵、保管について、料理につ

b) 日本原始農業試論(1956)

- 縄文時代＝狩猟採集の自然経済という定説に疑問
- 世界史的な視点から再検討
- イネをやることだけが農業ではない
- 一応農業が存在したではなく、当時(縄文時代に)農業が支配的生業だったのでは？
- 畑仕事～貯蔵・管理・調理: 女性の仕事＝母系社会

(スライド35)

縄文＝原始農耕社会の立証にむけて

1. 栽培植物は何だったか？
クリの重視+トチ、クルミ+菜園的農耕
2. 定住性に連関して畑の遺跡の存在を推定
3. 遺物の大部分が農耕用具であることを実証すべき
農耕具としての有肩石斧(←松本信廣・大山柏)
調理用としての石棒・石皿
木の棒でも十分土は起こせたはず
カレンダーの重要性(大湯立石＝日時計?)

(スライド36)

いて、それから編年より観たる食品について、というタイトルがついています。縄文時代の自然遺物の研究では、どうしてもまじめな人ほど出土遺物のリストを作ることに研究の焦点が行きがちなのですが、酒詰先生は、すでに1961年の段階で、食べ物という視点から書いていらっしゃる。タイトル自体が『食料総説』ということからみても分かると思うのですが、これは自然遺物や生業の研究ではなく、食について新しい視点を提出したご研究です。(スライド37)

重要なのは、環境管理と縄文農耕論の基礎となるお考えをここで出していらっしゃるということです。クリ林の管理や維持を行うことによって、クリ林の増加が縄文時代中期にかけてあったのではないかと述べていらっしゃいます。日本の中で、縄文前期と比べて寒冷化した中期の気候に幸されて、クリの豊産が連続したのではないかと、そして、水が欠乏しても強靱で灌漑が不要なクリは、台地上の栽培植物として最適だったのではないかと、ということをおっしゃっています。(スライド38)

このようなひとつひとつのご指摘を部分だけで見てしまうと、それほど新しいと思われなくてもかもしれませんが、縄文時代の食についての全体像を見ながら、1961年という早い段階でクリ林の話を出していらっしゃることは、今、縄文時代の生態研究を目指している私たちにとって、非常に勉強になる教えです。

時間がだいぶ迫っていますので、最後に、今まで概観してきたような酒詰先生のお仕事が、

c) 日本縄文石器時代食料総説(1961)

余論

- A. 食料獲得について
- B. 食料の貯蔵、保管について
- C. 料理について
- D. 編年より観たる食品について

(スライド37)

d) 環境管理と縄文農耕論

クリ林の管理・維持→クリ林の増加

- 寒い縄文中期の気候に幸されてクリの豊産が連続
- 水が欠乏しても強靱＝灌漑不要＝台上の栽培植物として最適

(スライド38)

3. 酒詰仲男と近年の縄文生態研究

- 1) 動・植物考古学の発展
- 水洗選別とフローテーション
 - 動・植物遺体の定量分析
 - 花粉・植物珪酸体・珪藻分析等のマイクロ遺体による環境復元
 - 季節性分析
 - 鳥浜・三内丸山とクリの管理栽培論

(スライド39)

プルを取って水洗選別、あるいは水に浮いたものを選んで植物の遺体を採取するフローテーションが、1980年代ぐらいから盛んに行われるようになりました。それとともに、動植物遺存体の定量分析、つまり何がいくつあったか、特に魚や動物の場合には、骨の数だけではなく最低何個体の生物がいたのか、といったような定量分析も、ここ数十年で進んできています。(スライド39)

もう一つ新しい動きとして、新しいとはいっても数十年前からなのですが、花粉や植物珪酸体、珪藻といった、顕微鏡で見ないと見えないマイクロな動植物遺存体の分析による環境復元も進んでいます。それと並行して、季節性分析、例えば動物の歯の年輪や貝の日輪を数えることによって、春夏秋冬どの季節に採取されたものか、というような分析も進んでいます。

このような新しいデータをもう一度見直していく過程で、福井県の鳥浜貝塚、今日も1962年の発掘の際の資料が展示されているかと思いますが、その鳥浜貝塚については、西田正規先生が80年代初めにクリの管理栽培論を新たに論文として書かれて、大きな話題になりました。それからもう少し後に発掘された三内丸山遺跡、これは1990年代の初めに発掘された青森県の遺跡ですが、この花粉分析の結果でも、クリの花粉がたくさん出ております。そういった例を通じて、クリの管理栽培が縄文時代に大事だったのではないかという意見が研究者の間からたくさん出ています。そのようなことを書く場合に、まず原点に戻って引用されるのが酒詰先生のクリ林論になります。

動植物遺存体の水洗選別作業



(スライド40)

現代における縄文時代の生態研究とどう関わってくるのか、ということをもとめとして述べさせていただきます。

1960年代以降、日本では緊急発掘の数が非常に増えまして、1970年代から1980年代には、特にたくさん遺跡が緊急発掘されたと同時に破壊されました。その過程で、考古学の資料が体系的に蓄積されていったわけです。その中で、動植物考古学については、緊急発掘が増えてきた当初から研究が進んだわけではなく、少し遅れて、土のサン

土壌の水洗選別では、この写真のような方法で土を洗います。これはカリフォルニア大学の学生さんたちに手伝ってもらって、青森で土のフローテーションを行ったときの写真です。右側にあるのは、トロント大学のゲイリー・クロフォード先生という方が原案を出して、改良された型のフローテーションの機械です。土をふるうというのも手間暇かかる作業で、このようなフローテーションの機械を使って効率的にふるうということが、やっと組織的にできるようになってきた状況です。

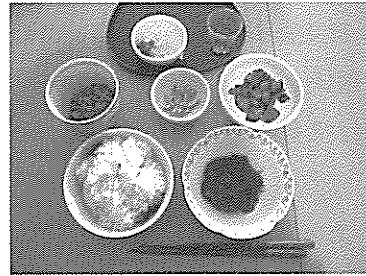
(スライド40)

動植物遺存体のデータについて、改めて考えなければいけないのは、縄文人には主食はあったのか、という問題です。食べ物の多様性の歴史的变化を考えると、縄文時代の資料がどのように貢献できるのかということです。

この写真は、私の去年のある日のお昼ご飯です。ごはんとおかずです。日本では、主食というよりはやはりお米ということを考えて思います。日本人の食べ物は、今、食生活が乱れているといいますが、それでもやはり炭水化物が主食（ステープル・フード）で、それにおかずがつくという基本は変わっていないかと思っています。ただし、世界中みんながそうではないわけで、動物性食物を主食とする人たちもいるわけです。例えばアメリカでは、チキンの丸焼きがドンと出てきて、これがメインミールだと言われます。そもそも、主食という概念自体も、植物質の食料をたくさん取る人たちに共通の概念と思って良いと思います。(スライド41)

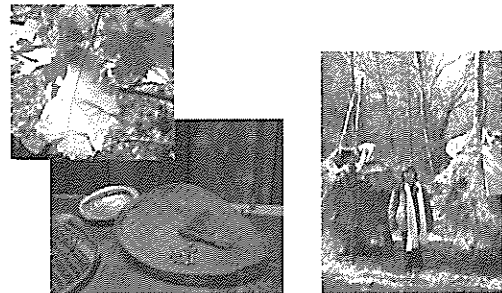
2) 縄文人に主食はあったか

主食の歴史と食の多様性



(スライド41)

カリフォルニアの先住民族の主食



(スライド42)

狩猟採集民については、たとえばカリフォルニアでは、先住民族の人たちがドングリを主食にしていたということが、民族誌などから分かっています。スライドの左側はカシの木とそのドングリ、加工用の道具ですが、葉がカシワのようなタイプのオークです。右側がドングリの貯蔵庫です。ヨセミテの歴史公園で復元されているものです。(スライド42)

ドングリのあく抜きは、カリフォルニアの場合には、土器を全く使わないで、砂地で桶のような形をつくり、ドングリ粉を入れて水でさらして、底にたまったデンプンを取って砂を洗い流す、という方法を取っています。縄文時代とは多分違うやり方だと思いますが、デンプン質の食べ物をたくさん採取して加工処理し、それを主食にして冬を越す、かなり定住的な生活をしてきた、という基本のパターンは変わらないと思います。カリフォルニアは、日本と緯度が近いので、どちらも、植物質食料にかなり大きな比重をかけた生活、狩猟採集というより採集狩猟の生活を行っていたということだと思います。このような縄文時代の食生活の基本を復元なさった酒詰先生のお仕事は、卓見だったと思います。

私の現在の研究のテーマの中心は、定住度と、食べ物や生業の多様性との関係です。定住度と食の多様性はコインの裏表のような関係で、食べ物の多様性が高ければ、居住の移動度が高い生活が可能です。定住は、食の多様性が減って主食が出てくる生活だ、と私は考えています。これについて、縄

文時代の研究者の中でも、皆の意見が一致するわけではありません。縄文時代の食べ物に関しては、食用とされた種の品目数だけ数えれば、食の多様性が高かったのは明らかだと思います。

しかし、いくら品目の総数が多くても、主食が登場すると、各人の食料の大部分は一品目に限定されることとなります。これをもって食の多様性の減少と考えるか、あるいは品目数さえ多ければ様々な食べ物の割合が不均質になっても多様性は高いと評価するのかについては、縄文時代の生業の研究をしている人たちの意見が一致していないのが現状です。このどちらの立場をとるのかによって、食の多様性と定住度、ひいてはシステムの持続性との関係についての理解も変わってきます。

分かりやすい例で言いますと、最近、食べ物の多様性が大事だから、一日に30品目食べましょうというようなことをよく言っています。新幹線に乗っても、30品目弁当というものを売っています。しかし、こまごまとしたおかずが30品目あっても、各品目の量がとても少なく、主食であるお米がお弁当箱の大部分を占めている場合には、食べ物の多様性は低いと考えるべきではないかというのが私の評価です。つまり、食の多様性の評価は、その指標の取り方によって大きく変わってくるということです。

私は、縄文人の定住ということを考える際、縄文前期後半から中期にかけて、植物質食料の重要性が上がったのが、定住性・システムの持続性の問題と連動しているのではないかと考えています。民族調査の結果によれば、狩猟採集民研究のなかでも、移動度の高い狩猟採集民、つまりいろいろなものを食べている人たちは、必ずしも定住するメリットは高くなく、動き回るほうが効率が良く、という報告例がたくさんあります。たとえば、南の島などで果物などの食料がどこに行ってもある地域では、食料の貯蔵はしないで、周りにあるものを食べて、それがなくなったら次に移る、というのが一番効率的です。定住しなくても、動き回るほうが効率が良くというような示唆もあります。ただ、これができるのは、食べ物の分布の季節的、空間的な分布が均質である所であって、そのような所では、食料を貯蔵して定住するよりも、貯蔵しないで動き回る方が良いのです。しかし、日本のように食料の季節的な変化が大きい所では、冬になれば食べられる物が減りますので、これはできません。できないときにどうするかというと、基本的には、人口密度を非常に低くして一年中動き回る形で暮らすか、あるいは人口密度が上がってきたら定住して貯蔵を行うかという、二つの選択肢しかあ

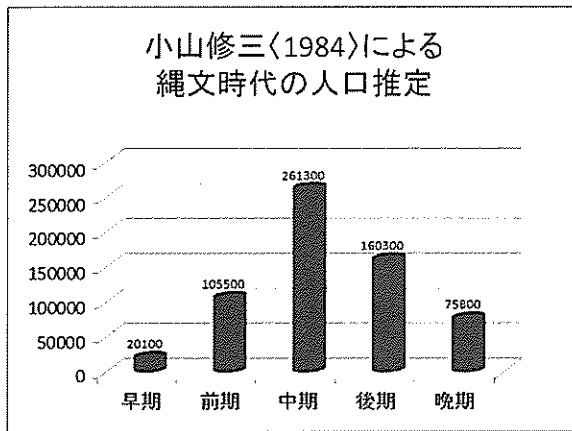
定住度と生業の多様性

- 定住度は食・生業の多様性と不可分の関係
- 移動度の高い狩猟採集民＝ジェネラリスト（食の多様性高）
- 移動度の低い狩猟採集民＝スペシャリスト（食の多様性低）

(スライド43)

りません。このように考えた場合、日本における縄文時代の歴史的変化は、食の多様性が高く移動度も高いジェネラリストから、食の多様性が減り移動度も低くなったスペシャリストへの移行の歴史と考えることができると思います。ただし、この変化は、必ずしも一元的・直線的な変化ではなく、縄文時代の中でもその両者の間を行ったり来たりしていたのではないかということを私は考えています。(スライド43)

それと関連して面白いのは、縄文時代における



(スライド44)



(スライド45)

推定人口の変化です。たくさんの研究者が、関東・東北地方において、縄文時代中期の遺跡数が多く、しかも大きな遺跡が多いという指摘をしてきました。小山修三先生による縄文時代の人口推定でも、縄文時代の各時期のうち、中期が一番高くなっています。この図に示した人口推定値は、いろいろな仮定に基づいていますので、推定値自体はいろいろ変わってくるかと思いますが、大きな流れはそれほど変わらないと思います。縄文時代中期は、植物質食料が重要だったのではないかとされていますが、この図を見ても、中期は縄文時代の中でも特殊な時期だったと考えられます。縄文中期の食べ物にはどのような特徴があったのか、そして、その中で、クリも含めたデンプン質食料はどのくらいの比重を占めていたのか、ということは、研究テーマとして重要です。(スライド44)

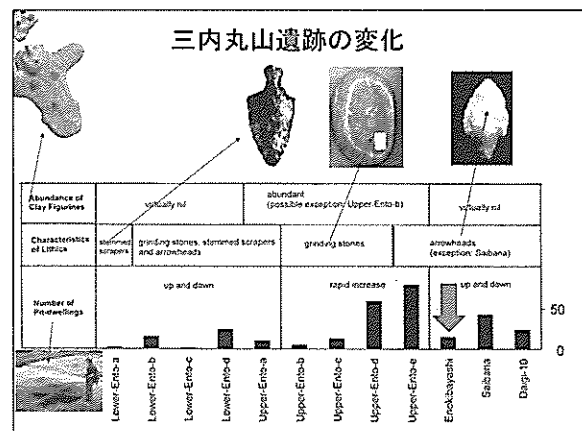
時間がないので急ぎます。縄文遺跡出土の木の実は、クリの他にもトチやドングリがあります。ここで示した写真は滋賀県粟津湖底貝塚

(スライド45)と青森県合子沢松森遺跡の出土資料です。(スライド46)

縄文時代中期の大遺跡として有名なのが青森県三内丸山遺跡です。この遺跡は縄文時代前期から居住されていました。三内丸山の居住の最初の頃は、石鏃や石匙などの狩猟道具や動物の解体道具がたくさん出ているのですが、時代が下るにつれて、磨石と呼んでいる植物質食料の加工具が増えてきて、縄文時代中期の中頃になると、磨石以外の石器がほとんど出土しなくなる時期があります(スライド



(スライド46)



(スライド47)

3) 環境考古学の台頭(2000年代～)

- 気候変動への関心
- マクロ・ミクロ動植物遺体分析の進展
- 持続可能性 Sustainability
- 回復力 Resilience と脆弱性 Vulnerability
- 生物多様性 Biodiversity
- 食の多様性とリスク
- 文化的景観 Landscape
- 歴史生態学の台頭

(スライド48)

の問題とどうつながっていたのかという議論がたくさん出てきています。その脈絡で縄文時代の考古学を考える場合、酒詰先生のお仕事は再評価されるべきだと思います。(スライド48)

環境考古学の中でも、ここ10年ぐらい、歴史生態学という分野が注目を浴びています。歴史生態学では、人間の行動が環境に与える影響を重視します。特に、環境管理の重要性というものが強調されています。同時に、世界各地におけるさまざまな歴史の軌跡を想定します。この研究分野は、文化の

4) 歴史生態学 HISTORICAL ECOLOGY

- 人間行動が環境に与える影響を重視(環境管理も含めて)
- 過去の経済・社会システムが、世界各地に固有の歴史の軌跡を作り出した過程の解明
- 文化の短期～長期的変化のプロセス解明

(スライド49)

短期から長期のプロセスを扱います。これらのテーマを考える上で、先史学考古学の資料はきわめて大事です。そういったことを考える上で、酒詰先生のお仕事はこれからの研究の基礎になるものです。(スライド49)

歴史生態学への考古学の応用ということを考えるときに、このスライドには私がテーマとしているものをいくつか挙げているのですが、これは先ほどの酒詰先生の原始農耕のお話、それから定住のお話などでテーマとして挙げてきたものと基

歴史生態学の考古学への応用

- 定住度
 - 生業・食の多様性
 - 人口と社会規模
 - 社会階層化
- ↓
- 環境の変化(気候変動・人間活動の環境への影響)
- ↓
- 文化の長期変化

(スライド50)

考古資料から見た文化要素と環境

- 人口 ← 遺跡規模と遺跡数
- 定住度 ← 遺跡分布
- 交易(物の移動) ← 産地分析
- 情報の移動 ← 遺物・遺構の型式
- 食と生業の多様性 ← 動植物遺体・石器組成の幅
- 環境 ← 花粉・海面水温・酸素同位体etc.

(スライド51)

本的に同じものです。(スライド50)

酒詰先生が縄文時代の研究で扱った主要なテーマの全てが、このような研究で重要になることが分かります。縄文時代の研究の中で重視されているものばかりです。(スライド51)

気候変動、資源と景観と人間活動との相互関係の研究材料については、酒詰先生の時代にはなかった新しい分析手法も出てきてはいますが、相互作用を考えるとという基本的な視点は変わりません。(スライド52)

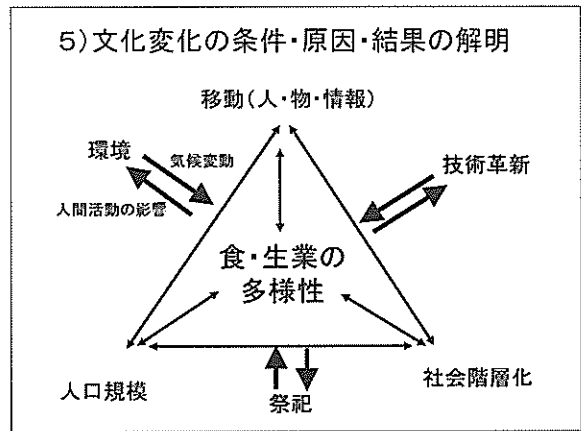
酒詰先生のなさったお仕事というのは、ある意味で、緊急発掘が盛んになる前の時代だからこそできたお仕事であり、それが今になって再評価されているのだと思います。

まとめますと、縄文時代の生態研究において、縄文時代の集落、生業の集約化、生業と表裏一体の関係にある食べ物の多様性、といったテーマを考える基礎になるお仕事をしてくださったのが酒詰先生だと思います。

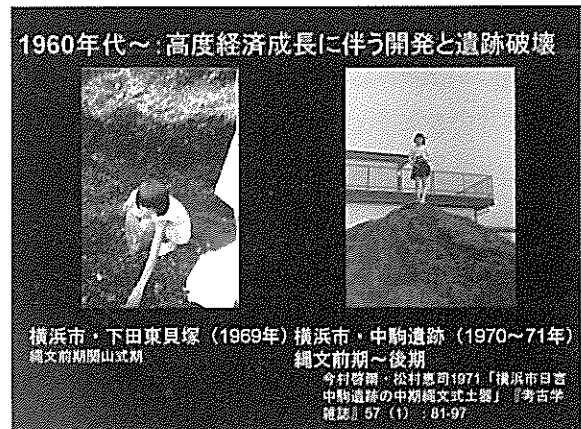
私が子供の頃、1960年代から1970年代初めにかけて、横浜市の日吉近辺の遺跡は、ほとんど壊されました(スライド53)。たくさんの緊急発掘が行われ、それから40年ほどたちまして、今は大規模な緊急発掘は減ってきています。減ってきた中で、では考古学は何をする学問だろうということをもう一度真剣に考える必要があります。先ほど松藤先生が、ここは行政発掘をする人を育てる大学ではない、研究者を育てる、という意味のことをおっしゃったと思います。そういう考え方の基礎をつくられたのが酒詰先生なのだと、今回、酒詰先生のお仕事を振り返る機会を与えていただき、改めて思いました。

長くなりましたが、以上で終わらせていただきます。

(了)



(スライド52)



(スライド53)